

〔書籍紹介〕

田島優著

『漱石と近代日本語』

中澤 信幸

本書は本学日本文学科・田島優教授による三冊目の著書である。本書の「あとがき」によれば、一冊目『近代漢字表記語の研究』（和泉書院、一九九八）は、著者の三十代の仕事のまとめということであった。一方、二冊目の『シリーズ〈現代日本語の世界〉3 現代漢字の世界』（朝倉書店、二〇〇八）は、「当用漢字表」「常用漢字表」や漢字制限に関するものであった。

上記二冊を知る者としては、本書の題名を見て、なぜ今回は「漱石と近代日本語なのか？」という素朴な疑問の念を禁じ得なかった。事実本書を手にしていた時に、この題名を見た周囲の何人かからは「漱石が近代の日本語を作ったということか？」という質問を受けた。確かに漱石は近代日本文学の代表的な作家である。その漱石が「近代日本語を作った」と考える人がいても、不思議ではないであろう。ただし言語の本質から考えれば、ある個人がある時代の言語を「作る」などということは、

本来ありえないことである。これは『源氏物語』の作者紫式部が、中古の日本語そのものを作ったわけではないというのと同様の話である。

この疑問は、本書第一章の緒言「なぜ、漱石の作品なのか」を読むことで氷解する。つまり著者の意図は「漱石が近代日本語を作った」ということではなく、漱石の作品を通して近代日本語の動きを見ていくということにある。そして漱石の作品が他の作家と比べて原稿・初出・単行本・データベースなどの資料に富んでいること、同時代を舞台としているために当時の言葉が反映されていることなどを、漱石を取り上げた理由として述べている。ただし緒言でも述べられるように、著者は入り口として漱石から入った上で、同時代の他の作家や前後の時代の作品についても検証することを怠っていない。

本書は次のような構成となっている。（各章の分節は省略。）

- 第一章 近代日本語資料としての漱石作品
- 第二章 漱石の生涯と近代日本語
- 第三章 違和感（ノイズ）
- 第四章 漱石と江戸語（東京方言）
- 第五章 語の移り変わり
- 第六章 翻訳語法の定着
- 第七章 話しことばの移り変わり

第八章 漱石の表記と書紀意識

「あとがき」にも述べられることであるが、本書は著者が実際に授業で行った内容をもとにしている。そのためか、私たちが一般に知っている研究書に比べて思考過程がより明確になっており、その分わかりやすくくなっている。(もともとこれは著者の研究論文のスタイルそのものでもあるが。) 日本語研究者は研究書として本書を読むことができるが、教壇に立つ者としては授業を組み立てる上での参考にもなる。もちろん学生にとつては、本書を読むことで著者の授業を受けているような感覚になるであろう。

先にも述べたように、本書は漱石の作品を通して近代日本語を見ていこうとする。この手の言語研究では、ひたすら作品の中に見える語や文法について記述することが優先し、ともすればその背景にある「人間」の存在を忘れてしまうことがある。しかし本書の第二章では、漱石の生涯と言語背景について丹念に検証している。漱石は言語形成期(四、五歳)と十四、五歳を東京で過ごしているが、その間いわゆる山の手と下町とを行き来している。つまり漱石は、山の言葉と下町言葉の両方に通じていたことになる。また漱石は明治二十八年四月から明治三十五年十二月まで東京を離れていたが、その約八年間は「東京語の成立」という意味では重要な時

期であった。著者は漱石の作品を通して近代日本語を見るに当たり、上記のような検証を行うなど、漱石という「人間」を決してないがしろにはしていない。言語は自然界にあるとはいふものの、それを使うのは「人間」である。その「人間」に着目するのはむしろ当然なのかも知れないが、私たち言語学者が忘れてはならないところでもある。

本書で取り上げている具体的な問題は、語誌、文法、漢字音、表記など多岐にわたる。その一つ一つについてここで触れることはしないが、特に印象に残っている内容として「当て字か誤字か」という問題に触れておきたい。

例えば漱石は「ぞんざい」を「存在」、「やかましい」を「八釜しい」、「くだい」を「苦奴い」、「けち」を「稀知」「希知」などと表記する。これらはこんにちでは漱石独特の表記法として好意的に受け取られることが多い。しかし漱石没後に『漱石全集』の編集にあたった弟子たちは、これらの表記が「当て字」なのか「誤字」なのか苦悩したようである。弟子の林原耕三によつて著された「漱石文法稿本」では「先生特殊の語法、用字の数例」などとして、これら「違和感」を抱いた漱石の語や表記などをまとめている。この辺りの事情は本書第三章に詳しく述べられている。そして漱石の特徴的な表記のそれ

(二〇〇九年十一月 翰林書房 三三六頁 五〇四〇円)

それぞれについては、本書の第八章第三節にて検証が行われている。その中で漱石の表記の特徴として、同じ語に対する表記の揺れが激しいこと、漢字平仮名交じり文の中で自立語に可能な限り漢字を当てようとしていること、そして漱石としては音が主であり漢字表記は従であったことなどが述べられる。漱石独特の表記というのは上記のような性格を持つものであり、谷崎潤一郎が指摘したように「無頓着で出鱈目」なものだったのである。にもかかわらず、「現代の文学研究者は漱石の偉大さによって漱石の当て字表記を好意的に見過ぎている」という現実があり、これに対して著者は警鐘を鳴らしている。ちなみにこの「当て字と誤字の境界」については、冒頭で紹介した『近代漢字表記語の研究』の終章第一節ですでに考察がなされている。

本書を読んでいると、漱石の生きていた東京・江戸が眼前に現れるようである。これは先にも述べたように本書が漱石という「人間」を大切にしているからであり、その意味で他の多くの(味気ない)言語学研究書とは一線を画す。専門外の人や初学者にもお勧めできる書であるが、言語学・日本語学の専門家にぜひ読んでもらいたい。そして「人間」が話す言語に対する研究の方法について、再確認するとよいだろう。この点は自戒を込めて強調しておく。

